

工藤優子詩集

春 宵

葵詩書財団

工藤優子詩集 春宵

著 者 工 藤 優 子
發行人 上 本 正 夫
發行所 葵詩書財団

広島県安芸郡海田町国信一―一四―三四
電 話 ○八二―八二三―四〇八八

発 行 ・ 平成四年二月二日

美術製版・東洋美術工芸社
頒価 三千円・送料 三百円
一九九二年版・通巻第四百十五卷



工藤優子詩集

春
宵

葵詩書財団

目 次

一 初郭公 14

二 執樹 16

三 花しぐれ 24

四 凍眠 30

五 残像 34

六 五月 38

七 夢走車 42

八 シネラマ 48

九 ほととぎす 52

十 冬のくらがり 56

十一 ひかれ紅葉 60

十二 春の匂い 64

十三 あるいは風の形 68

十四 猫二題 72

十五 声のたより 76

十六 行かないでいる海への郷愁 80

七 雪合戦 82

六 紙ひこうき 86

五 初冬のバラ 90

四 曇った空の何気なく海 94

三 暮色 98

三 棘の木 102

三 夢違い 106

二 門 110

三 赤とんぼ 118

六 一夜の雪 122

七 熱い鳥影 126

八 棘もつ舌 130

九 ひげのない猫 134

十 春宵 138

三 布の浮き島花影を置く 142

跋 千葉三郎 150

詩集

春
宵

初郭公

曇った朝

ひとときわ高く

小さな存在を告げている

明るい声の梯子を掛けながら

まどろみのはしはし雨は待ちきれず

かすかな音を立てて家並を抜け

かっかつかつこう

田植えも終ったよ　かつこう

苗をめぐり　藤の花房けだるく揺らし

香り立つ窓に過ぎ去った人人を起こす

忘れかけた安らぎに浸る時

白い雨のしじまに翼だけ残して

私の郭公はもう溶けはじめ